

「小矢部市まちづくり研究会（第2期生）先進地視察研修報告書」

監 事	氏 名	島津 貴之
-----	-----	-------

1. 郡上市役所

①国重要無形文化財「郡上おどり」

- 特長
- ・ 400年以上の歴史
 - ・ 見物型の踊りではなく、参加型の踊り
 - ・ 全10曲の豊富な種目
 - ・ 徹夜おどりとシーズンの長さ

運営 郡上おどり保存会 大正11年より

郡上おどり運営委員会 昭和46年より（予算 2,200万円）

②水と緑の環境文化交流都市

- ・ 自然環境を守り「郡上らしい」居住環境
- ・ 資源循環システム
- ・ 利便性と環境に配慮した基盤整備

2. 郡上八幡のまちなみ

①郡上八幡博覧館

- ・ 大正時代の建物をそのまま残し、「水とおどりの城下町」として、郡上八幡の魅力を「水」・「歴史」・「わざ」・「おどり」の各コーナーにゆったりと、分かりやすく、楽しく展示紹介

②郡上八幡のまちなみ

- ・ 美しい水辺空間を持つ城下町
- ・ 水循環系を組み込んだ町
- ・ 水場の交流空間
- ・ 水舟のある町（水舟）の水音

3. (株)明宝レディース

・会社の概要

昭和50年 仲良しグループ結成（当時 7名からスタート）

昭和58年 トマトケチャップ試作

平成 4年 (株)明宝レディース設立（命名 梶原知事）

平成 9年 中日農業賞受賞

平成20年 農商工連携88選に選定

主力商品 明宝トマトケチャップ・明宝ケチャドレ・明宝とまとジャム
社員は、全員女性

4. 道の駅 明宝

・指定管理者 (株)明宝マスターズ（明宝ハムの製造会社）

平成 5年 「道の駅」登録

平成12年 「全国道の駅グランプリ2000」において優秀賞を受賞

東海北陸自動車道開通の為、物産館の売り上げが落ち込む

来客のほとんどが観光客（冬期はスキー客）

4ヶ所の先進地視察をさせていただき感じたことは、郡上市は、地域住民も歴史・伝統・文化を守り伝え、観光にしっかりと活かしています。まちなみも「水の恵みを活かすまちづくり」として、環境に配慮したまちづくりを先駆けてきた成果が、今のまちづくりになっています。そして、特産物も郡上でしか買えないものづくりに特化していますし、そのアイデアも素晴らしいと思います。

小矢部市は、今あるものを大切に、しっかりビジョンを持ってまちづくりをしなくてはなりません。特産物の開発も急務ですが、道の駅の立ち上げまでには、ピーアールできる物が少しでも多くなれば良いと思います。

「小矢部市まちづくり研究会（第2期生）先進地視察研修報告書」

監 事	氏 名	野 澤 正 幸
-----	-----	---------

平成16年3月に7町村が合併し1,000k㎡を超える面積を有する郡上市は、旧町村の着実な取り組みにより、それぞれの地域特性を活かしたまちづくりが進められていました。

「郡上おどり」は日本三大民謡と数えられ、400年余りの歴史を持ち日本を代表するおどりです。郡上には古くから各地におどりの文化があり、おどり場がその集落の人々のまとまりを強めるとともに、他の集落の人々との交流の場であったことでもあります。長年にわたって人から人へと受け継がれ今日に至っているとのことでありました。また、同時に郡上おどりを通じて、地域の人々が、運営する体制が綿々と受け継がれていることに、地域誇りと意気込みが強く感じられました。これには深く感銘した。ただ残念なのは、あまりに観光を意識する反面、本来の主旨がずれてはきていないかなとも感じを受けました。しかし、まちづくりの基本をしっかりと踏まえた取り組みであることは、間違いありません。小生は、常々「まちづくり」の大前提は、地域の中にいかに溶け込み、多くの人々の共感を得て、普段から当たり前のように体感にすることのできる必要があると考えております。まさに、「郡上おどり」こそがその本随で、地域の人に愛され、ともに生きてきたのだろうと思われます。

「郡上おどり」の取り組みもさることながら、「水辺空間を活かしたまちづくり」への取り組みも大変興味がそそられました。豊富なわき水を利用した水利用形態には、古来からの人々の知恵と体験が集積され、暮らしの中で活用されています。これもまた、水を媒体とした人と人、人と自然が深く交流する水辺空間が、「ポケットパーク構想」によっていくつかの補助事業をうまく取り入れ、用水の改修等により街並みの景観保存へと受け継がれています。また、この歴史的水路の保存するため、ワークショップを開催するなど地域と行政が共に議論を交わし計画を作成し、住民が建物の高さ、色彩、看板等景観のソフト面のルールを作り、維持管理を担い、それに基づき行政がハードを支援する手法を取り入れられ、住民と行政がはっきりとした目的を定め連携し一体的に取り組みされており、改めて「協働」の重要性が再確認できました。さらには、用水沿いの各戸には、バケツが吊してあり、防火用水として、あるいは民芸品の陳列コーナーとして、水路が一役買っている側面があり、そこには、人々の好みと生活の知恵が加わって、この町の風情を残しており、平日にも関わらず観光客も散見され、スローライフを満喫されていたことだと思います。日々疲れている小生も少し心が癒された感じがします。

小矢部市では、近年まれに見る大型プロジェクト事業である「道の駅」を観光の拠点に位置づけ、前田家のゆかりの地、稲葉山牧場、宮島峡等を観光地として利用する計画も進めているようですが、いかに地域を、人を、遺産をいかに巻き込むための仕掛け作りが必要であり、強いリーダーシップを発揮できる人材の発掘も必要です。「道の駅」のオープンまで残り僅かではありますが、郡上市のように地域の人、自然、歴史を活かしたまちづくりをするためのツールは小矢部市にも溢れていると思います。地域をこれまで以上に盛り上げるため具体的な計画をワークショップを通じ、住民と行政が共通認識のもと高い目標を設定し着実に実施していくことで、これからの小矢部市のモデル事業となるような取り組みが望まれます。

農家の女性7人で始めたケチャップづくりが、東京の大手百貨店に納入するまでのブランド力を作り上げたことは、すばらしい実績であり地域経済にも大きな発展をもたらしています。地場産品にこだわり、旧村の支援を受け建設した加工施設、地域労働の能力に応じた数量管理をすることで、高品質なものを提供されています。ただ、大成功を収めても保守的にならず、ケチャップ以外の新商品の開発も着実に進められており、常に前向きに事業を展開されていることは、これからの地域づくりを大いに参考にすべきであります。

郡上市ではどの旧町村も、そもそもスキー場をはじめとする観光客の往来が多いためか、人への「もてなしの心」が自然に身に付いている人間性の方が多いのではないかとつくづく感じました。

小矢部市の主産業は、農業であります。温暖な気候で地勢にも恵まれているため、古来より多くの住民が水稻によって生活を営んできました。現在も、機械化の進展により兼業でも容易に取り組めることから、水稻を中心とした農業がほぼ全市的に展開されています。水稻は他の作物に比べ比較的手間がかからないうえ、農家へ安定的に収入をもたらしてきました。そのためか、地域、集落単位での水利、祭り等で狭い地域内での交流は盛んでありましたが、こと地域外になるとめっきり交流がなく、周りが見えない、あるいは、周りにあまり気を使うことをせず、大方がいわゆる「井の中の蛙」状態だったように思います。域

外との交流は、地域だけではなく、人の思考までも活性化させてくれます。他の自治体を知ることはとても大事なことです。実は、今回の研修では、小矢部市を知るために先進地を尋ねていることに気づいた方も多いのではないのでしょうか。これからも、いろんな機会を通じて、市外の方々と積極的な交流を図ることで、客観的に小矢部市を見ていかなければならないと思っています。住民1人ひとりが新しい創造力と情報、自信を持って実践していかななくては、求心力のある「まちづくり」は成り立ちません。

今回の視察は、とても有意義であり、これからの実践の場に活かしていきたいとの思いを一段と強くしました。

「小矢部市まちづくり研究会（第2期生）先進地視察研修報告書」

まち研おやべ事務担当（市民協働課）

松井 武史

1 岐阜県郡上市「郡上市役所」（11/28（金） 9：00～11：00）

（1）あいさつ（郡上市商工観光部観光課 一柳課長）

・平成16年3月に3つの町と4つの村が合併して郡上市となり、5年目を迎えた。岐阜のほぼ真ん中であり、日本のほぼ中心にも位置する。

・郡上市という「郡上おどり」、「郡上八幡」で全国的には知られている。

・面積は、1,000 km²と広大であり、標高は、（低いところで）約100mと（高いところで）約1,800mで高低差が大きい。また、森林が約9割占めている。

・人口は年々減ってきており、合併当初は5万人いたが、現在は4万8千人ほど。

・北陸の方はスキーといえば、長野方面へ行かれる方が多いが、東海北陸自動車道の開通により、北陸方面からのスキー客の来訪を期待している。

・郡上市には、郡上おどりと白鳥おどりの二つがある。郡上おどりは夏の期間には、34夜おどりつづける。

（2）郡上八幡のまちなみや水の恵みを活かしたまちづくりについて

（郡上市建設部都市住宅課都市まちづくり係 井上主任）

・八幡町だけでは、人口約16,500人（平成17年国調）、面積242 km²、うち93%が山林。年間総降水量は2,800 mm（全国平均1,700 mmなので雨が多い地域）、年平均気温12.3℃。

・郡上市のなかで八幡町だけが都市計画区域で818ha。

・市街地の中央部を（とびこみで有名な）吉田川（長良川の支流）が西から東へ流れている。

・雨が多く、石灰岩を含む地質で保水力に恵まれているため、豊富な湧水がいたるところに湧出している。そのため町中に水が流れ、カワド（共同洗い場）がいたるところにある。

・郡上八幡の中でも有名な宗祇水は、名水百選の第一選に選ばれた。

・旧八幡町の総合計画では、水を活用した取り組みとして、市街地の各所に「ポケットパーク」の整備を行った。合計で34か所。

・水のまちをPRするためにあえて水路にふたをしない。

・こうした水を活かしたまちづくりへの取り組みにより、観光客が増加してきたが、用水路の老朽化が進み3地区から改修依頼が寄せられた。3面郡上石張り、全面開渠、家庭雑排水と分離、水路セギの復活など歴史的水路として、町並みに合わせて改修し、道路修景としても町並みに合わせたカラー舗装を行った。

・水路、道路の整備をきっかけに古い町並みの保存の機運が高まり、

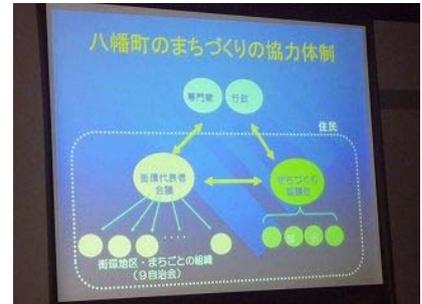
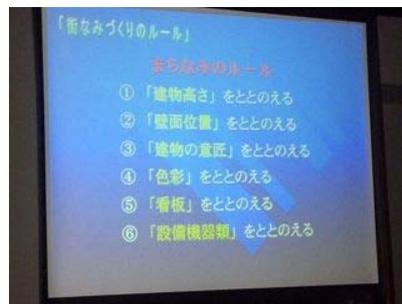
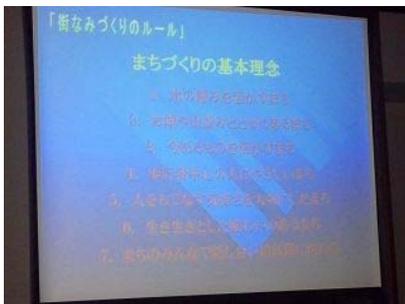
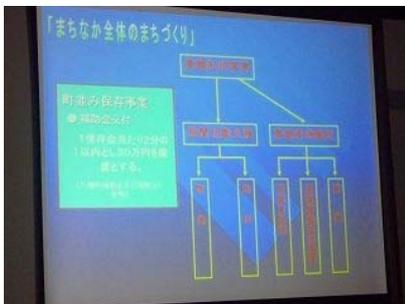
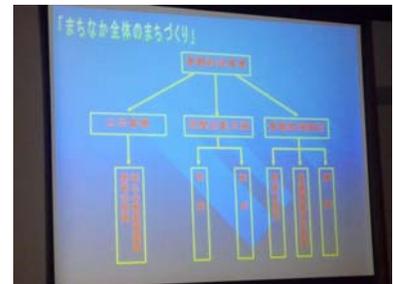


町並み保存会（柳町、職人町、鍛冶屋町の3つの保存会）が発足。

・保存会の組織（活動）は、水路委員会（用水の維持管理など）、景観委員会（修景整備活動）、建物審査委員会（建築物のデザインに関する審査）で構成されている。

・まちなか全体のまちづくりとして、景観形成事業を展開。景観整備事業は、「景観条例制定」「民間活動支援」「公共事業」の3本柱で取り組んだ。このうち「公共事業」については、「街なみ環境整備事業」として中心市街地の9自治会を対象に道水路の美装化などを行ってきた。この計画策定においては、当時ではいち早くワークショップの手法を取り入れて、町民の意見の聴取に努めて、理解を得ながら進めた。

・今後は、住民の意見（思い）を取り入れることにさらに努めながら景観維持に取り組んでいきたいと考えている。



(3) 郡上おどりを活かしたまちづくりについて

(郡上市商工観光部観光課 大坪主任)

・郡上おどりの起源は約400年前（寛永4年、1627年）。当時の郡上八幡城主が寺社や門前町で奨励。さらに、寛文7年（1667年）、城の大改修の際に、城下町の整備に合わせて、おどりを奨励。

・平成3年400年祭を開催。全国3大盆踊り（阿波踊り、花笠踊り、郡上踊り）で競演した。

・海外公演も実施。2007年には「郡上おどり in 北京」、2008年には「…in トロント」。地元の人がほとんど自費で参加。

・特徴としては、（八尾おわら、阿波、花笠踊りのような）見物型のおどりではなく、参加型の踊りである。服装自由で、気軽に輪に入って踊り、踊った後には達成感がある。全10曲の豊富な種目からなり、振り付けはどれも簡単である。

・踊りの期間は、4日間の徹夜踊りを含めて34夜からなるが、これだけのロングランのものは、全国で唯一。特に徹夜踊りは民家の真ん中で朝まで騒いでいるような雰囲気独特である。

・郡上おどりの運営は、大正11年に町民有志により設立された「郡上おどり保存会」で行ってきた。さらに昭和46年には、全町的なものとするを目的に「郡上おどり運営委員会」を設立し、シーズ

ン中の統括的な役割を担っている。

・「郡上おどり運営委員会」は、観光協会を主体として、保存会、商工会、自治会などで構成し、事務局は、市観光課が担当している。活動内容は、シーズン中の運営を円滑に行うために日程や会場設営などの調整を行うことや郡上おどりの普及・保存・継承活動も行っている。普及活動としては、出張公演を行っている。特に今年度は、南砺市の伝統芸能祭りへの参加など北陸方面への出張が多かった。継承活動の面では、ジュニア育成に力を入れている。

・委員会の運営予算については、収入としては市からの補助金 1,500 万円や駐車場協力金 525 万円など、支出は、徹夜運営に 1,100 万円、縁日運営に 350 万円、保存会活動費に 450 万円などである（予算規模は 2,200 万円）。課題は、自主財源が 15 万円というその少なさ（市補助金の 1%しかない。クレジットカードの郡上おどりのデザイン使用料）。徹夜運営の 1,100 万円は警備員の配置費など、保存会活動費の 450 万円のうち 400 万円は、おどりに出ていただいた方 1 人につき 1 回（3 時間）で 1,000 円という謝礼に使っている。



（４）質疑応答

Q. 商工会は一つか？

⇒平成 19 年に合併し、ひとつとなった。本所は郡上市市役所内にある。

Q. 郡上おどりがメジャーになった理由は？

⇒大正 11 年の保存会設立により、戦前から市外への PR 活動を行ってきたことや国の重要文化財指定を受けている徹夜おどり（4 日間）の実施など。

Q. 白鳥おどりとの関係は？

⇒行政としてはあまり関与していない（観光協会がメインで運営している）が、補助金を 600 万円出している。関与度の割合としては、郡上おどり 9 割（来客数 34 万人）、白鳥おどりが 1 割（来客数 10 万人弱、20 夜連続おどる）。郡上おどりは従来から行政が人的にも支援。

Q. 合併後の市が抱える問題点は？

⇒合併構成団体は、旧郡上郡からなっており広域行政も展開していたためもともと一体感があったので、スムーズに合併した方だが、交付税削減により財政難のため、人件費を削減した（人員を減らした）。これにより、地域振興事務所の人員を減らさざるを得ず、これに対する不平不満が出てきている。

⇒また、広大な市域のためいろんな面で経費がかかる。たとえば、メール便は年間約 4 万 km（1 日当たり約 160 km）走行していることなど。

Q. 郡上市の今後の課題は？

⇒郡上おどりを地元の人があまり踊らなくなってきたこと。こどもを中心とした取り組みにより地元の人を引き込んでいこうと考えている。

2 岐阜県郡上市「郡上八幡のまちなみ」(11/28(金) 11:10~12:40)

(1) 郡上八幡博覧館(博覧館とは「博物館」と「博覧会」の合成語。30分コース。)

- ・大正時代の建物(旧税務署)をそのまま残し、「水とおどりの城下町」である郡上八幡の魅力「水」「歴史」「わざ」を各コーナーに分けて、わかりやすく展示紹介。
- ・「おどり」コーナーでは、郡上おどりの実演もあり、1年を通して、おどりをPRできるような体制となっていた。

<博覧館内の風景>

【「水」のコーナー】



【「歴史」のコーナー】



【「わざ」のコーナー】





【「おどり」のコーナー】



(2) 郡上八幡のまちなみ（観光案内人の説明を受けながら散策。60分コース）

・郡上八幡のまちなみについて、観光案内人の説明を受けながら散策を行った。



【↑34 あるポケットパークの一つ】

【↑町並みづくりのルールにしたがった造作など↑】



【宗祇水→】



【いがわこみち】



【サンプル工房】



【旧庁舎記念館（旧郡上八幡役場、内部は郡上八幡の特産品の展示販売や軽食の施設となっている）】



【その他郡上八幡のまちなみ風景】



3 岐阜県郡上市「株式会社明宝レディース」(11/28(金) 14:00~15:20)

(株式会社明宝レディース代表取締役 本川 榮子 氏)

○会社の概要・設立に至った経緯やトマトケチャップづくりについて

・「新しいことに挑戦したい」と地元の農家のお嫁さんたちが中心となり、トマト(品種:桃太郎)の栽培を始めたが、いざ栽培をはじめると収穫できるのは規格外のものばかりで出荷できずに残り、これをなんとか活用したいと考え“トマトケチャップ”づくりに挑戦したのがきっかけ。(“桃太郎”はもともとケチャップ用の品種ではない)

・着色料等の添加物を使わないことを基本に、6年かけて開発した。この間、給食センターの人(栄養士)などいろいろな人に味見をしていただき、意見をいただきながら試行錯誤を繰り返した。

・社員11人すべて女性で、営業マンはいない。(東京などの)いろいろなイベント会場等へ出かけ、試食をしていただきながら口コミで広まった。「どっちの料理ショー」で取り上げられてからは、爆発的に広まった。三越などの大手の百貨店にも納品している。

・現在は郡上市内産以外に高山市内産のトマトも使用し、足りないときは、他の産地のものも使うが、県内産のトマトしか使わない。

・夏場はトマトのままから毎日加工し、シーズンオフは、冷凍保存したトマトを使いながら生産している。

・煮詰める作業から瓶へのシール貼りまで、ほとんどが手作業。機械より手作業の方が早いと考えているし、社員(地元の女性)の働く場所の確保(雇用確保)のためにも機械化はしていない。

・一窯で瓶詰めで200本しか作れない。

・施設整備に一億一千万円かかった。これは市(旧明宝村)が負担。

・(本川氏は、)食堂やスキー場などいろいろな現場を経験し、この会社を引っ張る存在となった。

・女性だけでよくここまで来れたなと思っている。途中何度も挫折しそうになった。

・課題は、後継者の育成。



4 岐阜県郡上市「道の駅 明宝」(11/28(金) 15:30~16:45)

○施設の概要や特色、道の駅を活かしたまちづくりについて

(郡上市明宝地域振興事務所 産業建設課 高田主査、(株)明宝マスターズ支配人 国田氏)

・平成元年12月27日オープン、面積17,000㎡。現在、指定管理者として(株)明宝マスターズにより管理・運営を行っている。(株)明宝マスターズは9名の社員(2名の常勤パート含む)。三セクだがほとんどは(株)明宝ハムが出資。親会社は(株)明宝ハム。

・指定管理者による管理年数は4月から3年。指定管理料は約13,000千円。

・平成12年には、「全国道の駅グランプリ2000」において優秀賞を受賞(全国551施設中)した。これは全国の中で売上げが上位にあったことが理由。

・下道であるので、東海北陸自動車道の開通により通行量が減るのではと思っていたが10月~11月の紅葉シーズンは逆に増えているという印象。特に富山・石川ナンバーの来客が増えている。

・野菜の直売所が好調(営業時間:8時~17時)。直売所は地元の生産者による協議会で運営。



<質疑応答>

Q. 道の駅での特産品PR方法や集客におけるポイントについて

⇒①明宝ハム、明宝スキー場ができたときにマスコミ(東海ラジオ・テレビ、岐阜放送)に取り上げられた。マスコミを通じたPRがうまくいった。また、観光協会にバス会社にDMを入れてもらうなどの工夫もしている。例:午前中に来館するとソーセイジプレゼントなどの集客の工夫。

②11月~3月の販売品は、漬物などの加工品が主。販売スペースに空きが出ないような(他県のものを入れるなどの)工夫はしている。

③4月に抽選会などのイベントをしている。

Q. 小矢部市でも道の駅を整備するが、気をつけた方がいいというポイントがあれば。

⇒テナントを入れる際のルールは決めておいた方がいい。小矢部市の場合、8号線という幹線に隣接している点がうらやましい。ここはもともと(明宝村時代)田んぼだけの道だった。

Q. 来客は、主にどの方面から。

⇒岐阜県、愛知県、三重県、滋賀県、富山県、石川県、福井県などの順。

【↓駅内の風景】



【野菜の直売所の風景など】



5 愛知県一宮市「138タワー」(11/29(土) 9:35~11:00)

(木曾三川公園管理センター 井上課長)

(1) ツインアーチ138の概要

・国営木曾三川公園138タワーパーク内に位置する施設で、一宮市のシンボリックな施設。平成7年4月に供用開始、タワーへの入館者年間159,000人(平成19年度、タワーパークの利用者は217万人)。設置者は、国と住宅都市整備公団(現在の独立行政法人都市再生機構)と一宮市。



・一宮市との協定により「財団法人公園緑地管理財団」が指定管理者として管理運営。

・営業時間は9時30分から17時までであり、これは開園当初から変わらず。ただし、土日祝日、8月及びクリスマスイベント時期(11月下旬から12月25日)は21時まで。休館日は、毎月第2月曜日(8月、12月は除く)。



(2) 運営面での課題

・一度タワーに昇ってしまうとなかなか次に昇ろうとしないので、飽きさせない取り組みをして、リピーターを確保するのが大命題。そのため毎年、公園内において季節イベントを実施し、タワーの利用促進に努めている。また、近年はタワーに昇っていただくための仕掛けとしてタワー内でのイベント展開を積極的に行っている。(①スプリングフェスタ、②ローズフェスタ、③サマーフェスタ、④オータムフェスタ、⑤ツインアーチのメリークリスマス。②以外はすべて実行委員会で実施。⑤が、一番集客が多く217万人中50万人、電飾代などで約17,000千円かかっている。)

・ファミリー層の利用割合が大きく、団体利用割合が小さいので、ここを増やしていくような旅行会社へのダイレクトメール等によるPRを強化している。

・(隣県ながら)岐阜県からの来客が少ないので、ここからの来客者増のため小中学校などの公共施設を対象とした広報強化に努めている。(来客調査とその分析によるピンポイントの対策。)

(3) タワーを活かしたまちづくりへの取り組み

・平成17年4月1日に一宮市、尾西市、木曾川町が合併し、新「一宮市」が誕生後に、新しい総合計画を策定しているが、その中では「若者が暮らしたいと思うまちをつくる」といった施策があり、この実現の一手段として138タワーを活かした取り組みを行っている。その取り組みとしては、タワーパークでのイベントの充実を行うなどしている。

(4) 施設見学

・リピーター確保に向けた取り組みが多く見受けられた。



(クロスの写真掲示)



6 岐阜県郡上市「クックラひるがの」(11/29(土) 13:20~13:55)

(株アーカイブス取締役総支配人 豊川 豊 氏)

○アーカイブス計画の概況と概要

・郡上市という田舎の都市に5つ(ひるがの高原スマートICを含めると6つ)のインターチェンジがあるが、これは政策的なものによるもの。高鷲ICと大和ICのみが開発ICで政策ICではないもの。

・郡上市高鷲地域(旧高鷲村:人口約3,500人)がどうやって生き残っていったらよいかを考えたときに、旧高鷲村時代にこの地域には第2(2つ)のICが必要だという結論に至り、長期計画を策定した。これが、アーカイブス計画のきっかけ。「高鷲地域活性化委員会」という商工会を中心としたメンバーで検討を重ね、郡上市への合併後については、「高鷲アーカイブス実施計画」を新市で実施していくことを確認。

・平成16年7月には、「高鷲アーカイブス実施計画」の実現に向け「たかすアーカイブス推進会」を設立し、SAの全体計画や新施設の基本設計のための全体計画を広く高鷲地域の歴史、文化、自然環境を活かすよう住民参加で作成した(実施報告書)。この実現に向け「たかすアーカイブス(株)」を設立(現在の株アーカイブスの前身)。この後平成17年8月に「株アーカイブス」を三セクではなく、すべて地元の民間企業出資で設立(現在は資本金248,000千円)。平成18年9月には『クックラひるがの』の造成工事に入り、平成20年3月には開業。

・平成16年7月には、「高鷲アーカイブス実施計画」の実現に向け「たかすアーカイブス推進会」を設立し、SAの全体計画や新施設の基本設計のための全体計画を広く高鷲地域の歴史、文化、自然環境を活かすよう住民参加で作成した(実施報告書)。この実現に向け「たかすアーカイブス(株)」を設立(現在の株アーカイブスの前身)。この後平成17年8月に「株アーカイブス」を三セクではなく、すべて地元の民間企業出資で設立(現在は資本金248,000千円)。平成18年9月には『クックラひるがの』の造成工事に入り、平成20年3月には開業。

・株アーカイブスの行う事業のコンセプトは、スマートICの開設に合わせて、ひるがの高原SA内の駐車場と市道側の駐車場から立ち寄れる複合商業施設を建設し、高鷲地域内はもとより市内、県内、自動車道沿い地域の農産物などの物産や情報を集積し、訪れる多くの方に利用してもらうこと。特に(一流企業などを)卒業した方たちから高鷲の若者が(インキュベータ的に事業の)勉強ができるような施設にすること。(別荘オーナーの中には一流企業から退いた方たちが多い。)

・なぜ三セクにしなかったかは、行政が絡むとスピード感のある事業展開ができないから。

・東海北陸自動車道の開通前の庄川IC~高鷲IC間の交通量が平成17年度で約230万台であったのに対し、全線開通後(平成20年度以降)では、約415万台と見込んでいた。

・IC建設を政策的にすすめてきたのかは、鉄道がないので自動車道(SAとIC)に頼るしかないという理由。地域の物は地域で出すとことが、これからの重要なポイント。

<質疑応答>

Q. 今後の展開は。

⇒地元の企業家を育てるために、テナント料をできるだけとらずに、若い人などが自由に出店できるような取り組みを行うこと。

Q. 建物の景観のコンセプトは。

⇒北欧風の雰囲気・イメージを進めてきた。『クックラ』はフィンランド語で『丘』の意味。

Q. この施設の整備による雇用の増は。

⇒30名ぐらいの増。テナントでは20名ぐらいの増。

Q. ホテルの宿泊目的は。

⇒今は、とびこみ客がほとんど。課題として、この地域で1~2日過ごせるような取り組みが必要。



7 岐阜県郡上市「ひるがの高原『牧歌の里』」(11/29(土) 14:05~15:35)

(株)ヒルトップ代表取締役 中田 良則 氏)

(1) 施設(園内)見学

(休園中にもかかわらず、施設内を遊覧できるロードトレインを社長さん自ら運行していただいた。)



(2) 施設整備に至った経緯や施設の特徴など

・夏場に別荘に来る人のためにレジャーとして何かできないかということから始まった。

・総面積 25ha (園内: 15ha、温泉館: 0.9ha、駐車場 (約 2000 台収容可能) 等 9 ha) のうち借地が約 6 割。

・三セク経営だがほとんどが地元の企業。行政 (当時の高鷲村) の出資はわずか 1.81%。

・物づくりができるので、長時間滞在できる施設となった。

・パートさんは、80 名のうち 50 名がかけもち。スキー場→牧

歌の里→スキー場→…というサイクル。高齢化が課題であり、派遣の若い人に頼らざるを得ない。社員 30 名のうち 10 名は常にこちらで、20 名は外 (レンタルスキー場事業など) へ出向。

・2005 年は愛地球博により、入場客が 22~23 万人と少なかったが、2008 年は 27 万人を超えた。やはり、東海北陸自動車道開通の影響により増えているのではと考えている。入場客の圏域別の割合は、中京圏が 8 割、北陸方面が 2 割。認知度はまだまだと考えている。大阪から日帰りされる方もいる。

・年間通じて多いのは、8 月の夏休み期間。日では 5/4 (ゴールデンウィーク)。

・立寄型観光施設 (約 1.5 時間) ではなく体験・滞在型観光施設 (半日以上) であるという点が、入場客数を伸ばしている理由。ピザづくりやオルゴールづくりなど体験メニューについては、検討を重ね増やしてきたが、まだまだ模索中。

・公共交通によるアクセスが悪いので、クルマで来るしかない。

・単年度黒字は、過去 2 回のみで累積赤字は結構ある。

・今後は、ネットでの囲い込みによる利用客の増も図る必要があると考えている。



<質疑応答>

Q. 課題は。

⇒若い人たちの雇用で、5人ぐらいが精一杯。3～5年で新陳代謝。また当初から高校生のバイトに頼ってきたが、近年はその勤労意欲も悪い方向に変わってきており、その点も課題。

Q. 牧歌の里のモデルは。

⇒ラベンダーなど畑は美瑛や富良野、牧舎は日高地方、バーベキューハウスはフルーツワイン工場。

8 まとめ（研修全体を通して感じたことなど）

今回、チャレンジ研修ということで「小矢部市まちづくり研究会」に同行する形で、岐阜県郡上市内6箇所、愛知県一宮市内1箇所の合計7箇所を視察した。一泊二日とはいえ7箇所もの視察先を訪れることができたことは、やはり東海北陸自動車道が開通したことによる交通アクセスが飛躍的にアップしたことと特に7町村が合併してできた都市とはいえ”郡上市”内には、見どころがたくさんあるということによるものだろうと思う。時間的な余裕があれば、実はまだ視察してみたいスポットがあったのだが、それくらい魅力にあふれている都市だと思う。そんな郡上市でさえ人口減少や財政難という問題に直面しているとのことだったが、都市と地方の格差が拡大していることを如実に実感した。

郡上市内の6箇所を視察して一貫して受け止められたのは、それぞれの地域の自然環境、歴史、文化などの特色を活かし、官と民（市民や企業など）が協力し、連携して（場合によっては民が率先して）“まちづくり”を進めているなど感じたことだった。それは、八幡地域のまちなみを保存するにあたり「街なみ環境整備事業」の計画策定においては、当時ではいち早くワークショップの手法を取り入れて住民の意見を取り入れ、理解を得ながら進めたことや高鷲地域のひるがの高原SAを中心とした全体計画を住民参加で作成したということに代表される。

また、一宮市の138タワーの視察においては、“紙飛行機飛ばし”などリピーター確保に重点をおいた取り組みが非常に参考になった。当市の「クロスランドおやべ」においてもすぐに実現できるものもあると思った。

近年の地方公共団体の厳しい財政状況や市町村合併を背景に、行政のみによる公共サービスの提供は困難な状況であるといわれ、地域活性化や多様化する地域課題への解決に対しては、新しい発想や柔軟さが求められている。こうした状況下で“まちづくり”を進めていくうえでは、郡上市の例のように市民や企業などの“民”のやる気や元気が重要であり、行政としてはこれらを支援する取り組みが重要な役割であると感じた。その方法としては、住民の意見がより取り入れられやすいような仕組みづくりや1%事業補助金による支援なども有効な施策であると思う。そして、市内の自然、歴史、文化、産業などの地域の特色について、日頃から情報収集や知識習得に努め、市民からいい意見や提案があったときに、付加価値や相乗効果を生むようなコーディネートをしてあげられる知識や経験を、職員が自ら培うことも、市民の理解者を増やし、協働してまちづくりを進めていくという点では、非常に重要であると思う。